



## 第2章

千代田区における過去の  
自然災害記録の教材化と  
ワークショップの実施

## 第1節 千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—

近藤 壮（共立女子大学 文芸学部）

### はじめに

2021年（令和3年）度から始まった、「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度共同事業における本研究も最終年度となった。2023年（令和5年）は、1923年（大正12年）に発生した関東大震災からちょうど100年目にあたることから、今年度は千代田区における過去の自然災害の歴史記録のうち、関東大震災を主要テーマとして、関連する資料の収集・研究を行い、あわせてこれまでの研究の成果として展覧会を開催した。具体的な内容としては次の3つである。

1. 関東大震災（1923年）から100年—震災時の千代田区における証言・映像の収集・分析
2. 企画展「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展の開催
3. 「関東大震災100年」パネル展示の実施

まず、「1. 関東大震災（1923年）から100年—震災時の千代田区における証言・映像の収集・分析」については、とくに千代田区域における次の2つに注目し、収集と分析を行った。

- （1）千代田区域における関東大震災の女性と子どもの証言・体験記の収集と分析
- （2）千代田区域における関東大震災の映像の分析

まず、（1）は、『大正大震災大火災』（大日本雄弁会講談社、1923年）、『東京市立小學校児童震災記念文集』（東京市学務課、1924年）など、当時発行された文献の中から千代田区域に関連する内容のものを抽出し、分析を行った。また（2）は、国立映画アーカイブ所蔵の映像（関東大震災映像デジタルアーカイブ（<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>）から千代田区域に関連するものを抽出し、文献や震災絵葉書との照合、分析などを行った。

また、「2. 企画展「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」展の開催」は、これまでの研究成果の報告として展覧会を開催した。開催にあたっては、学生による展示プロジェクトチームを結成し、教員（近藤）と学生（6名）とでミーティングを重ねながら、展覧会の企画・立案から実施までを行った。

「3. 「関東大震災100年」パネル展示の実施」は、昨年度に実施した千代田区域における関東大震災の古写真（絵はがき）のパネル展の地域展開である。今年度は本学だけではなく、千代田区キャンパスコンソーシアムの各大学、千代田区の施設での展示を行った。

ここでは上記の内容の概要を報告していきたい。

### 1. 関東大震災（1923年）から100年—震災時の千代田区内の証言・映像の収集・分析 千代田区域の被災状況

2023年（令和5年）は、1923年（大正12年）に発生した関東大震災からちょうど100年目にあたる。関東大震災は、言うまでもなく日本の災害史において甚大な被害をもたらした自然災害である。まず、関東大震災の被害概要のデータを押さえておきたい（表1）。

表1 関東大震災の被害概要

関東大震災の被害概要	
発生日時	1923年（大正12）9月1日 午前11時58分
地震の規模	マグニチュード7.9（推定）
人的被害	死者・行方不明者10万5,385人（うち火災が原因とされるのは9万1,781人）
住宅被害	37万棟以上（全半壊、焼失、流失、埋没による）
経済被害	約52億7,500万円＝当時の東京市による推計 当時のGNP推定値（名目）の35.4%に上る

「内閣府中央防災会議」（2023年8月）より

関東大震災の被害概要における人的被害について、さらに細かく見ていくと、内務省社会局『大正震災誌』（1926年）によれば、東京府（東京都）、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県で死者9万1,344人、行方不明者1万3,275人、重傷者1万6,514人、軽傷者3万5,560人、被害を受けた世帯数69万4,621世帯、罹災者数約340万人にのぼったという。

千代田区域（麹町区・神田区）での人的被害としては、麹町区内では死者95人、行方不明者42人、神田区内では死者1,055人、行方不明者464人を数えたという。また、被害世帯率は、麹町区で72パーセント、神田区では91パーセントにおよび、神田区の焼失面積は94パーセントにも及んでいる。とくに火災の被害が甚大であり、家屋の全半焼した世帯の割合は、麹町区で55.9%、神田区では89.4%にも及んでいる。神田神保町周辺もほぼ焼け野原のようになった（図1）。千代田区域の世帯、人口は、当然のことながら、震災前（大正12年6月末）と震災後（大正13年6月末）を比較すると、激減している（表2）。



図1 「神田神保町ヨリ九段方面之惨状」（「震災絵葉書」より） 1923年

表2 千代田区域の震災前後の世帯数と人口

震災前後の世帯数と人口	震災前（大正12年6月末）		震災後（大正13年6月末）	
	世帯数	人数合計	世帯数	人数合計
麴町区	10,393	54,982人	9,850	48,493人
神田区	26,610	139,537人	20,803	102,860人

（震災後の一年間）『大阪朝日新聞』1924年9月15日よりデータ抽出）

### （1）千代田区域における関東大震災の女性と子どもの証言・体験記の収集と分析

関東大震災の発生後、当時の人たちの目にはどのようなことが映ったのか、そして何を考え、どのように生き延びたのか。いくつかの証言や体験記が残されているが、今年度はその中から千代田区域における女性と子どもたち証言を中心にデータ収集と分析を行った。その一部を紹介したい。

#### 女性たちの証言① 共立女子職業学校の帰りに牛込駅で電車に乗っていた学生

「ホームの屋根瓦がからからと落下してゆき、市電通りの砲兵工蔽の門の守衛所の屋根から、火が出て燃え上っていました。こんな大地震に遭ったのは初めてのことであり、暫くして車掌が牛込駅（現・飯田橋駅）は潰れてしまい、電車は動きませんから降りて下さいといます。しかし線路まで足が届かず降りられないので、車掌さんに助けて貰って地上へ降りました時、大きな余震がありました。」（『共立女子学園百年史』より）



図2 「共立女子職業学校寄宿生の体操」(「絵はがき」より、大正時代)  
背後にみられる校舎は関東大震災によって倒壊・全焼。共立女子職業学校（現・共立女子大学）は東京の学校で最大の被害、犠牲者が出た。

**共立女子職業学校**（現・共立女子大学、東京都千代田区一ツ橋）

校舎の被害：校舎・寄宿舎倒壊。のち、すべて焼失。

死者：教職員6人・生徒68人、計74人

## 女性たちの証言② 清川虹子 (1912-2002・女優)

「関東大震災は小学校五年生のときでした。一橋図書館の帰り、小川町交差点のところで、ウインドに飾ってあった写真や、市電までが大きく揺れてるんです。すぐ横の道路がパカッと割れてました。大きな余震のなかをやっと家に帰り着いて、母といっしょに背中に荷物をしょって神田橋のほうへ逃げたんです。誰かが「河岸へ行ったら危ないよ、もどれ！」って叫んでました。それで上野に向かったんですが、神田橋のほうへ行った人は、みんな押されて川へ落ちて死んだということでした。松戸の叔父が迎えに来て、荷車に乗って松戸まで行くあいだにどれだけ死体を見たか、ずっと死体の山ですよ。それを焼いているんですよ。利根川を流れて来るのも見ました。震災の悲惨さは、子ども心に忘れられません。」(『千代田区女性史』第3巻より)



図3 「東京大震災実況 神田橋」(『震災絵葉書』より) 1923年  
崩落した神田橋の様子。神田橋は千代田区大手町1丁目から神田錦町1丁目と内神田1丁目の間に懸かる橋。

## 子どもたちの証言① 「避難の途中」 神田区 淡路尋常小学校 6年男子

「あゝ角のかんばんに火がついたと妹が言った。見れば小川町の角にある仁丹のかんばんが炎々として燃えている。さあ仕度が出来たから、早く逃げようと母がおっしゃった、早く上野へ逃げるとに荷物の上ののって盛に叫んでいる巡査の声にしたがって須田町へ出た四方から集まった人々の顔を見れば皆青い顔をして心配の色が見える。あたりを見れば真赤になってどんどん燃えている。上野の方から万世橋にかけては人の山車や人でうずまった万世橋をやっとのことで渡って御成街道へ出た。あたりはもうすっかり日は暮れてただ青い星がきらきらかがやいているばかりである。上野の山の石段の所は提灯でうずもらうとしている程提灯が沢山あった。あの人出なら今夜ねられないと思った。

上野へついて今来た所を見ますと人が大勢後からどんどんおしかけていて毒蛇の舌の様な火は空の星と比べてものすごい感じがした。どんとどんと大砲の様な音が時々聞こえる。まだ火事は止まない。まるで戦地へ行った様な気分がした、そして気が自然にひきしまった。」(『東京市立小學校児童震災記念文集』東京市学務課、1924年より)

## 子どもたちの証言② 「おそろしかった九月一日」 神田区 淡路尋常小学校 6年女子

「九月一日に私どもは学校にいて長く会わなかった先生やお友達とともになつかしい話をして別れました。家につくとはや十一時でした。第二学期の準備にとりかかろうとすると同時に「ミシミシ、ガラガラ」と恐ろしい地震は此の華やかな大東京に押し寄せてきました。私はあまりゆれるので机のわきにつっぷしてしまいました。その中に大音響と共に隣の庫が一時にくづれ落ちました。そちこちから親を呼ぶ子供の声が聞えてきます。時々ミシミシゆれるのでとうとう電車通りへ出ました。道はもう一ぱいの人でした。午後三時半頃にははや火の手は山の様に押しよせてきましたので私ども一家も逃げ迷う人々の中にまじって親子は互に手と手を結びあって猛火に迫れながらやっと宮城前まで逃

げのびました。宮城前の広場は住むに家のない焼けだされた人で一ぱいでした。中でも殊に気の毒であったのは子を持つ親のやるせなさであります。子供は無心に笑いながら親のち房をしゃぶって楽しい夢路をたどっています。こうして恐怖にみちた一夜も明けて二日の朝は天空高く上りました。平和な大東京も一寸の間にたやすく破壊されてしまいました。私達が永遠にわすれることの出来ない此の日はとても言葉に言いつくせないみじめさでありました。家も衣服も其の他何もない焼けだされた人の心はどんなでしょう。」(『東京市立小學校兒童震災記念文集』東京市学務課、1924年より)



図4 「宮城前」(「震災絵葉書」より) 1923年

宮城前(皇居前)広場(東京都千代田区皇居外苑1)には、震災発生直後から約10万人の避難民が集まったという。内閣府資料によると都内では上野公園に次いで2番目に避難民が多かった場所である。

#### 子どもたちの証言② 「九月一日を追懐して」 神田区 西小川尋常小學校 6年男子

「大正十二年九月一日は我等を呪ったあの恐ろしい大震火災のあった日である。其の日は丁度空高く晴れ渡っていて是が二百十日かと思ふ様な好天気であった。正に時計の針が十二時を指さんとした刹那「ゴー」と地鳴りがすると共に忽ち大地がゆれだした。一秒二秒と益々震動が烈くなる。家は倒れ、山は崩れ、土地は裂け花の都は忽ちにして修羅場と化してしまった。己が家内のものを助けるため救いを求めているもの、血まみれになって走って居るもの、泣き叫ぶもの、実に悲惨な光景となった。見る見る内に四方に火の手が上がった呪いの火は帝都をなめつくさんばかりの勢をもって四方に広がった。僕等は九段にひなんした。人々の顔は皆青ざめて居る。火勢は益々加わるばかりである。しばらく悲惨な沈黙が続いたかと思うと「東京は全滅だ」「此処が焼けたらどうしよう」などと悲痛な叫び声が聞こえて来る。どどーんと云う砲兵工廠の火薬の爆発と共に地が少しゆれる、人々益々不安の色深くなりて行く。太陽は西に没してあたりは暗くなって来た。火は燃えるばかりである。一日、二日、三日と火は燃え荒れた、見渡す限りの焼野原となった。」(『東京市立小學校兒童震災記念文集』東京市学務課、1924年より)

子どもたちの証言①②は、淡路尋常小學校(千代田区神田淡路町2丁目23-7/後に廃校、現在はワテラス(高層ビル)と千代田区立淡路公園)の生徒のものであるが、それぞれの避難先は、上野公園と宮城(皇居)であった。また、証言③の西小川尋常小學校(千代田区西神田2丁目6-2/後に廃校、現在は西神田コスモス館)の生徒は、九段方面に避難している。その他、当時の女性や子どもたちの証言をひも解いていくと、震災直後の混乱した様子が実によく伝わってくる。災害は、人々の生活、生命に大きな影響を及ぼすが、女性や子ども、高齢者など、社会的により弱い立場の人々への人的被害が大きいことが改めて確認される。これは現代の私たちにも共通することである。

## (2) 千代田区域における関東大震災の映像の分析

国立映画アーカイブでは、所蔵の映像をウェブサイト（関東大震災映像デジタルアーカイブ：<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>）で公開している。このウェブサイトでは、撮影場所、シーンで分類された「クリップ」単位での検索・閲覧が可能となっており、千代田区域のシーンには「地割れした和田倉濠付近の道」「地割れした牛込駅前」の道」「壁が損壊した郵船ビル」「火災炎上中の神田方面を望む」「炎上する帝国劇場と警視庁」「神田明神高台から万世橋駅方向を望む」「焼け残った万世橋駅」「愛国婦人会による救援活動」「靖国神社境内のバラック」「宮城外苑の避難民収容テント」「日比谷公園野外音楽堂前の野外少国民学校」「焼跡となった神田駅前」「日比谷公園内に設置されたバラック」「焼失した如水会館と崩落した一ツ橋」など32篇公開されている。ここでは「愛国婦人会による救援活動」を紹介したい。

### 映像「愛国婦人会による救援活動」 麹町区の愛国婦人会本部で救援物資を積み込む人たち

「関東大震災映像デジタルアーカイブ」（国立映画アーカイブ）

[https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/clips/m01\\_034.html](https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/clips/m01_034.html)

愛国婦人会とは、明治34年（1901）に創設された団体で、近代日本で最初の全国的規模の婦人団体である。日本国内だけでなく、世界各地にも拠点があり、最盛期には700万人の会員がいたという。関東大震災の直後の活動としては、類焼を免れた九段の本部にいち早く事務所を置き、まず九段郵便局内に罹災者を収容し救護にあたった。それと同時にフランス大使館跡や牛ヶ淵公園などに避難していた約二千人に炊き出しを行ったという。とくに女性・子ども・高齢者の救護・支援に力を入れ、母乳の足りない人のために、「牛乳に依る育児法」という配布物を作成したり、妊産婦乳児保護班（産婦人科医一人、産婆二人、看護師一人）二班編成し毎日巡回診療を行ったという。このような女性団体による先駆的な救護・支援活動が千代田区から始められ、その活動が徐々に広がりを見せたことは注目できよう。震災後の女性たちによる主な支援活動・救援活動と内容は次のとおりである。

#### 女性たちによる支援活動・救援活動

震災直後：愛国婦人会

9月4日：日本基督教婦人矯風会

9月11日：日本女子大学桜楓会

9月20日：自由学園

…東京連合婦人会の結成

（支援活動・救援活動内容）

- \* 避難生活の場や食事の提供
- \* 衣類や布団の配布
- \* 授産所の設置、職業の紹介
- \* 個別カードを用いた調査など



図5 「愛国婦人会発祥の地」の碑  
（千代田区九段南 1-6-11） 筆者撮影

## 2. 企画展「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展の開催

### (1) 趣旨

2021年度から始まった「千代田学」共同提案事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」も最終年度となる。【研究1】「千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積」の一つの集大成として、パネル展だけではなく、実物資料・作品での展覧会を企画した。くしくも2023年は関東大震災の発生からちょうど100年にあたる。1923年9月1日に関東地方を襲ったこの大地震では、死者・行方不明者10万人に上ったが、さきに触れたように共立女子職業学校（現・共立女子大学）では甚大な被害があり、校舎・寄宿舎の倒壊だけではなく、教職員・学生の計74の方が亡くなっている。今後数十年のあいだに巨大地震が起こることが予測されている現在、過去の自然災害、とくに千代田区域で起きた過去の自然災害について、関連する資料を展示・紹介することによって、私たちができる備えについて考える機会を持つことは意義のあることである。

### (2) 展覧会開催に向けて

展覧会を開催するにあたり、まず学生を主体としたプロジェクトチームを結成した。具体的には、2023年7月から私が受け持っている授業（講義・ゼミ）の受講生を中心にメンバーを募集し、9月までに次の6名の学生からエントリーがあった。

加藤 恵 (共立女子大学 文芸学部2年)  
亀岡愛実 (共立女子大学 文芸学部2年)  
貴田紗由香 (共立女子大学 文芸学部2年)  
杉山みなみ (共立女子大学 文芸学部2年)  
ス ニン トゥー (共立女子大学 文芸学部2年)  
濱野なつめ (共立女子大学 文芸学部2年)

上記学生6名と教員（近藤）とのプロジェクトチームが9月から本格的に始動した。

学内での展示を念頭に置いてのことではあるが、学生全員が学部2年生で展覧会に携わることが初めてということもあり、教員（近藤）の指導のもと、展覧会を共に作り上げていくというかたちで進めた。具体的には、毎週月曜日の5時限終了後（19時10分～・本館12階1273研究室前にて）ミーティング・勉強会を開催することとし、第1回ミーティングにおいて、次のタスクが学生たちに示された。

### (3) プロジェクトメンバー・タスク

- ① 千代田区における過去の自然災害についての研究
- ② 展覧会（「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」展）の開催
- ③ ② 図録（小冊子）の作成
  - ・資料・作品解説の執筆
  - ・コラムの執筆
- ④ 各種イベント
  - ・ギャラリー・トーク（展覧会開催期間中）
- ⑤ その他
  - ・② のフライヤー（チラシ）、リーフレットの作成



- ・展示パネルの作成
- ・展示キャプションの執筆

⑥ 展覧会見学（勉強会）

- ・特別展 関東大震災 100 年「首都東京の復興ものがたり～未来へ繋ぐ 100 年の記憶～」  
2023 年 11 月 26 日（日）まで 場所：千代田区立日比谷図書文化館

まず優先的に決める必要があることは、展覧会を「いつ」「どこで」開催するかということである。実物資料を展示することから、資料の運搬費用やセキュリティの面からも、学内での展示ということがまず決まった。ただ、学内での展示可能期間が入試や他のイベントとの兼ね合いにより限定された。この点はプロジェクトの始動が遅かったことが原因であり、悔やまれる。しかしながら、短期間ではあるものの共立女子大学神田一ツ橋キャンパス本館 1 階の展示スペース、および展示ケースを確保することができた。ミーティングを重ねたうえで、最終的には次の内容で開催することが決定した。

○展覧会名称：「千代田区における過去の自然災害  
～安政大地震と関東大震災～」展

○主催：千代田区キャンパスコンソーシアム・共立女子大学

○会期：2023 年 12 月 18 日（月）～25 日（月）

10:00～17:00（日曜休）

○出品内容：安政大地震と関東大震災の関連資料、約 50 点

○入場料：無料

○関連事業：学生よるギャラリー・トーク

2023 年 12 月 23 日（土）13:30～14:30

○会場：共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス

本館 1 階 展示室

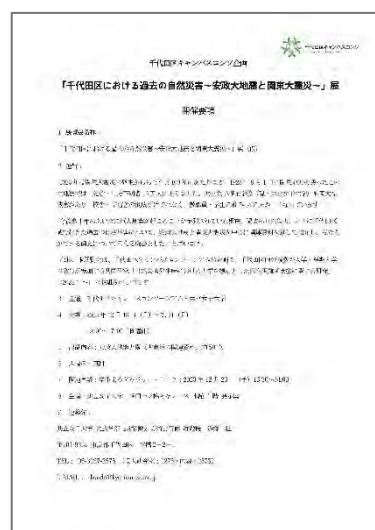


図6 展覧会 開催要項

展覧会の「開催要項」の確定と同時に、学生と資料調査を進めながら、展示資料・作品の選定、キャプション（解説文）執筆の割り振り、展示パネル・コラムの執筆なども順次進められた。展示資料・作品の選定については、教員主導で行ったが、キャプション・展示パネル・コラムの執筆については、学生たちが主体となり、「自分が調べたいもの・執筆したいもの」を選んでもらい、教員がそれをサポートするというかたちをとった。また、教員が用意したタスク以外に、学生たちから展覧会のキャラクターを作成したいという要望が出された。キャラクターは学生がデザインしたいくつかの案が出され、ミーティングによって、図7が本展のキャラクターに決定した。このキャラクターは、展覧会場でのパネルやキャプション、バナーあるいはフライヤーなどに登場させ、ややもすれば重いテーマである展示内容を中和させてくれる役割を担ってくれた。



図7 学生デザインによる本展  
キャラクター「ナッケン」

#### (4) 展覧会出品資料選定

展示資料の選定については、2021年度から行っている千代田区における過去の自然災害の歴史記録の調査過程で確認した資料を中心として、展示・借用可能な資料をリストアップしていった。とくに安政大地震と関東大震災の2つの自然災害を取り上げるため、資料がどちらかに偏ることのないようバランスを考慮しながら選定を進めた。具体的な資料としては、《鯨絵》(複製)や《震災絵はがき》など、神保町の古書店周辺で収集した資料、国立国会図書館、東京都立中央図書館が原本である複製資料、千代田区在住・在勤の方の個人所蔵の実物資料など、25件の資料を選定した(表3)。

表3 「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展(出品リスト)

No.	資料・作品名称	作者名	員数	時代(制作年)	備考
1	《鎮火安心図巻》	鬼蔦斎	1巻	嘉永7年(1854)	複製(原本・国立国会図書館)
2	安政の大地震大火絵図		1枚	安政2年(1855)	
3	《町火消纏装束之図》上・下		2巻	江戸時代(19世紀)	複製(原本・都立中央図書館)
3	《安政大地震鯨絵》		一括	安政2年(1855)	複製
4	鯨絵《大鯨江戸の賑ひ》		1枚	安政2年(1855)	複製
5	鯨絵《鯨の見舞い》		1枚	安政2年(1855)	複製
6	鳶口		2点	明治～昭和初期	
7	龍吐水		一点	19世紀	
8	火消頭巾		1点	昭和初期	
9	火消半纏《纏》		1領	昭和初期	
10	絵はがき《廃墟の都》(震災スケッチ第一集)	神保朋世	4枚1組	1923年	
11	絵はがき《廃墟の都》(震災スケッチ第二集)	神保朋世	4枚1組	1923年	
12	《関東大震災全地域鳥瞰図絵》	吉田初三郎	1枚	1924年9月	
13	絵はがき《尋ね人》	露谷虹児	1枚	1923年	
14	絵はがき《焼跡の月》	露谷虹児	1枚	1923年	
15	絵はがき《絶望》	露谷虹児	1枚	1923年	
16	絵はがき《家なき人々》	露谷虹児	1枚	1923年	
17	絵はがき《関東大震災》(古写真)		一括	1923年	
18	《震災かるた》	川端龍子	絵札48枚、文字札48枚	1923年	
19	新聞記事《大阪毎日新聞号外》		1部	1923年9月2日	
20	新聞記事《東京日日新聞》		9部	1923年10月	
21	大正大震災被害明細 最新東京市全図		1舗	1923年	
22	東京大震災火災絵巻		2巻	1923年頃	
23	《大正十二年 帝都大震災火災系統地図》		1舗	1923年12月	
24	《関東大震災画報 写真時報》		1冊	1923年10月1日	
25	絵はがき《罹災者ヲ探ス西郷サン》		1冊	1922年3月	

## (5) 展覧会広報

展覧会の広報用資料としてフライヤー（チラシ）を作成した（図8）。配布先は、千代田区内の各文化施設、千代田区キャンパスコンソの各大学、また本学の教職員・学生には、各授業内や教授会などの機会に随時配布を行った。またポスターについては、予算の関係で作成しなかったが、ウェブサイトなどSNSでの情報伝達・拡散に力を入れた。



図8 「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」展フライヤー（オモテ・ウラ）

## (6) 会場設営・展示作業

展覧会の準備・展示作業は、2023年12月16日（土）に行われた。展示パネルやバナーなどは、作業当日までに印刷業者に作成を委託をし（原稿はプロジェクトメンバーによる）、キャプションは、貼りパネ（7mm厚）を用いて、手作業で作成を行った。



図9 展示解説パネル



図10 有孔ボード(パンチングボード)の運搬



図11 展示バナーの取り付け作業



図12 展示作業完了

## (7) 展覧会の様子

展覧会は2023年12月18日(月)から25日(月)までの7日間、共立女子大学神田一ツ橋キャンパス1階の展示ホールで開催された。キャンパス1階の学生・教職員が自由に行き来できるスペースなので、来場者数はカウントしていない。ただ、会場内にメッセージ・ボードのブースを用意し、任意で観覧者からのメッセージを募ったところ、多数の感想が寄せられた(図16)。内容は、勉強になった、満足度が高い、という好意的な内容が多く、概ね評価していただいたことが実感できた。

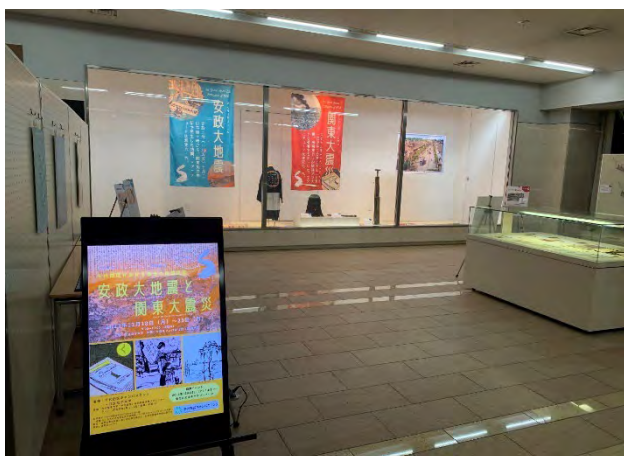


図13 展示入口(手前はデジタルサイネージ)



図14 震災かるた(1923年)と防災グッズ



図15 手前は関東大震災の実物資料、壁面は震災絵葉書



図17 展示パネルの例②

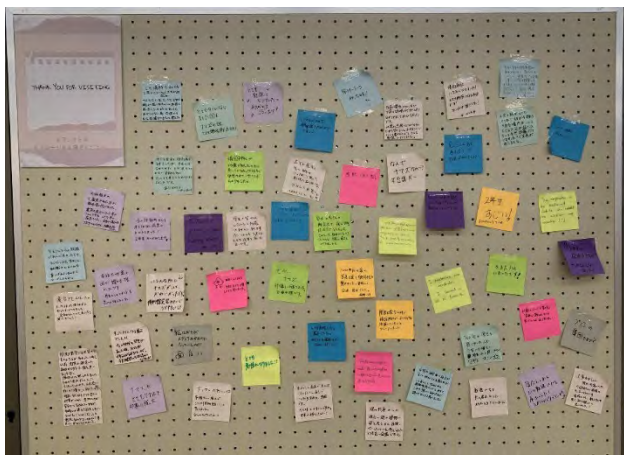


図16 展覧会のメッセージ・ボード

### (8) ギャラリー・トーク

展覧会の関連イベントとして、2023年12月23日（土）13時30分から学生によるギャラリー・トークを開催した。冒頭で教員（近藤）が全体の趣旨説明を行い、その後プロジェクトメンバー（学生5人）による、展示資料の解説が行われた。



図18 ギャラリー・トークの様子 ①



図19 ギャラリー・トークの様子 ③



図20 ギャラリー・トークの様子 ②

### 3. 「関東大震災100年」パネル展の実施

展覧会「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展とは別に、今年度も関東大震災の記念絵葉書の中から、千代田区域内の様子を写した写真をピックアップして、パネル展「関東大震災100年」を開催した。

関東大震災の記念絵葉書は、震災直後の1923年から相当数発行されている。甚大な被害を受けた様子、ときには目を覆いたくなるような悲惨な場面を写した写真が絵葉書として一般大衆に流通するという感覚は現代のそれとは異なるものといえる。それは、一つに現代と当時のメディアの違いということが大きいだろう。100年前の当時は、現代のようにテレビやインターネット、SNSなどの情報伝達手段はもちろんなく、絵葉書という媒体を通して、文章ではなく、写真というヴィジュアルコンテンツで人々に震災の現状・情報を伝達するという役割を担っていたといえる。

展示は、千代田区域における関東大震災の記念絵葉書と『関東大震災画報：写真時報』（東京写真

時報社、1923年10月) 所載の東京焼失区域地図、計15枚をA1サイズに拡大、解説を添えパネルとしたものである。各展示期間は次のとおりである。

- \* 6月12日～6月16日 (共立女子大学神田一ツ橋キャンパス 2号館 1F ギャラリー) (図21)
- \* 9月1日 (共立女子大学神田一ツ橋キャンパス 2号館 2F) (図22)
- \* 9月9日 (千代田区男女共同参画センターMIW/千代田区役所 4階) (図23)
- \* 9月11日～10月2日 (法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 1階) (図24)
- \* 11月1日～13日 (東京家政学院大学千代田三番町キャンパス 1階ロビー)



図21 共立女子大学神田一ツ橋キャンパス  
2号館1F ギャラリー(6/12～16)



図22 共立女子大学神田一ツ橋キャンパス  
2号館 2F (9/1)

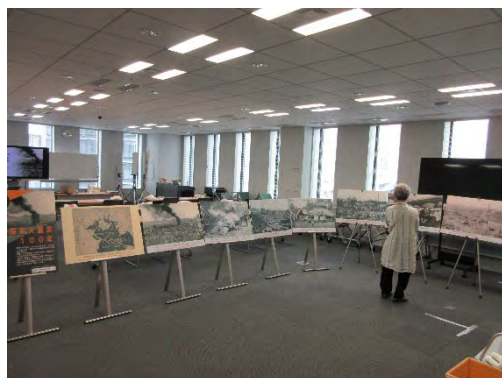


図23 千代田区男女共同参画センターMIW  
/千代田区役所4階 (9/9)



図24 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー1階 玄関ホール(9/11～10/2)

## おわりに

今から100年前に関東大震災という未曾有の災害があったことは、誰もが知っていることであろう。100年前と比べれば、災害時の情報収集・伝達、提供システムなどは格段に充実している。また、社会体制や私たちの生活スタイルも大きく変化している。だからといって、100年前の出来事を単なる過去のものとするのは早計だろう。過去の災害の情報を知ることによって、そこから学ぶことはたくさんある。被災者・帰宅困難者の支援・対策、避難所の運営など、100年前のそれと変わらず、改善の余地が多分にあることも多いといえる。そして、今を生きる私たちは改めて災害の歴史に向き合い、災害時にどのような行動をとるべきか、どのように困難を乗り越えていくか、思考の比重をより傾け、誰の身に降りかかってもおかしくない災害というものに備えていくべきである。

## 参考文献

- ・『関東震災画報』第1～3輯、大阪毎日新聞社、1923年
- ・『関東大震災画報：写真時報』東京写真時報社、1923年10月
- ・『大正大震災写真帖』報知新聞編輯局、1923年
- ・『大震災写真画報』第1～3輯、大阪毎日新聞社、1923年
- ・「震災後の一年間」『大阪朝日新聞』1924年9月15日
- ・『大正十二年 大震災記念写真帖』山田商店、1931年
- ・『新編 千代田区史 通史編』東京都千代田区、1998年
- ・『共立女子学園百年史』共立女子学園百年史編纂委員会、1986年
- ・『東京市立小學校兒童震災記念文集』東京市学務課、1924年
- ・『(財)東京市政調査会市政専門図書館所蔵関東大震災に関する文献目録』(図書編 雑誌編「都市問題」掲載編)  
(財)東京市政調査会市政専門図書館、2005年1月
- ・『千代田区女性史』(全3巻)千代田区・千代田区女性史編集委員会、ドメス出版、2000年
- ・折井美耶子・女性の歴史研究会『女たちが立ち上がった 関東大震災と東京連合婦人会』ドメス出版、2017年
- ・上村千賀子『メアリ・ビーアドと女性史：日本女性の真力を発掘した米歴史家』藤原書店、2019年
- ・関東大震災映像デジタルアーカイブ (国立映画アーカイブ)  
<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/> (参照日：2024年3月1日)
- ・ANNnewsCH【関東大震災100年】被災者支援に女性が団結 映像の西洋人女性は誰？(2024年3月1日)  
<https://www.youtube.com/watch?v=G5PaAPILtzs> (参照日：2024年3月1日)
- ・浅野富美枝・天童睦子編『災害女性学をつくる』生活思想社、2021年
- ・浅野富美枝『関東大震災 被災者支援に動いた女たちの軌跡』生活思想社、2023年



## 第2節 千代田区の災害に関するウィキペディア記事執筆ワークショップの実施

谷島 貫太（二松学舎大学 文学部）

### 1. はじめに

ウィキペディアタウンと呼ばれる、オンライン百科事典 Wikipedia を活用したワークショップが存在する。これは、地域の文化財や史跡を対象とし、グループでウィキペディアの記事を執筆・編集していく試みだ。実施の形式にはバリエーションがあるが、多くの場合では、実際に街歩きをしながら取材を行い、また文献資料を読み込みつつ記事を書き上げていく。この作業を通して、その対象についての深い知識を身につけていくことができる。加えて自身の作業が Wikipedia の記事として公開されることで、その対象について一種の愛着とまた責任感のようなものも生まれる。ほかにもさまざまなメリットが存在するが、ウィキペディアタウンは総合的な学びの機会として注目を集めており、コロナ前には毎週日本のどこかでこのワークショップが開催されるという状況にあった。

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2023年度千代田学「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」の一環として、「災害」をテーマとしたウィキペディアタウンを実施した。千代田区内の災害に関連するトピックのウィキペディア記事執筆を通して、災害についての学びの機会を生み出していくのが狙いだ。本章では、2024年2月25日に実施されたワークショップについて報告していく。

### 2. 災害とウィキペディアタウン

谷島ゼミでは2018年度から開始したウィキペディアタウンの試みは、2020年度以降、コロナの感染拡大を受けて休止となった。感染状況もある程度落ち着いてきた2022年度に、千代田学採択事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」に加わる形で、この年度からは「災害」をテーマとしたウィキペディアタウンを実施することとなった。

ウィキペディアタウンを実施するにあたって、最初に重要となるのが記事執筆対象として取り上げるトピックの選定だ。この選定にあたっては、1) まだウィキペディアの記事が存在しておらず、2) 独立した記事として取り上げる価値があり、3) 記事執筆にあたって十分な文献資料を利用することができる、という条件を満たす必要がある。多くの重要な歴史的文化的文化財にはすでに記事が存在しており、また興味深い文化財であっても関連資料を見つけられないものについては記事を書くのが難しい。ウィキペディアタウンにおいては、丁寧に出典となる資料を示しながら記事を書いていくことが求められる。

検討の結果、今年度は神田の大火をとりあげることにした。昨年度取り上げた「南明館」という勧工場（明治から大正にかけて登場した、百貨店の前身となる商業施設）をトピックとして扱った際に神田の大火も関わっていたことも判断材料の一つとなった。そもそも神田は江戸期から火事が多発した地域であり、また火事は都市の形を大きく変える契機としても機能していた。神田の大火を切り口とすることで、災害と都市の関係について再考することができるのではないかと考えた。ただし神田の大火という表現は多くの文献に現れるが、実際にはこの言葉は特定の火事のことを指すわけではない。神田地域では多くの大火が起こっていることから、文脈によってこの言葉によって異なる火災が指し示される。まずは神田の大火が指し示しうる正確な対象を整理するところから

調査を開始した。

## 2-1. 資料調査

資料調査はまず千代田区の千代田図書館で行ったが、調査の結果、国会図書館のデジタルコレクションに多くの関連資料が公開されていることが判明した。加えて、デジタルコレクションの公開範囲に含まれていない資料の調査のため、一部の資料については日比谷図書文化館および国会図書館を利用した。

神田地域では江戸時代より多くの火災の被害に遭ってきたが、今回のワークショップでは明治と大正の時期に生じた火災に焦点を当てることとした。明治維新を経て、東京という都市の形は急速に変容を遂げつつあり、それぞれの時期に生じた火災はその時点での東京の在り方を浮かび上がらせる触媒として機能しているからである。明治大正期に限っても神田地域では多くの火災が生じていたが、調査の結果、以下の三つの火災を取り上げることとした。

### ○明治期の大火

#### ・松枝大火（明治14年）

神田松枝町から出火し、家屋の全焼一万戸超、被災者も3万6000人を超えた大火。被災地域には橋本町のスラム街も含まれ、当該区画の再開発のきっかけともなった。同年発令された東京防火令の効果もあり、翌年からは神田地区の大火は大きく減少するが、その直前に起こったものとしては最大の大火だ。

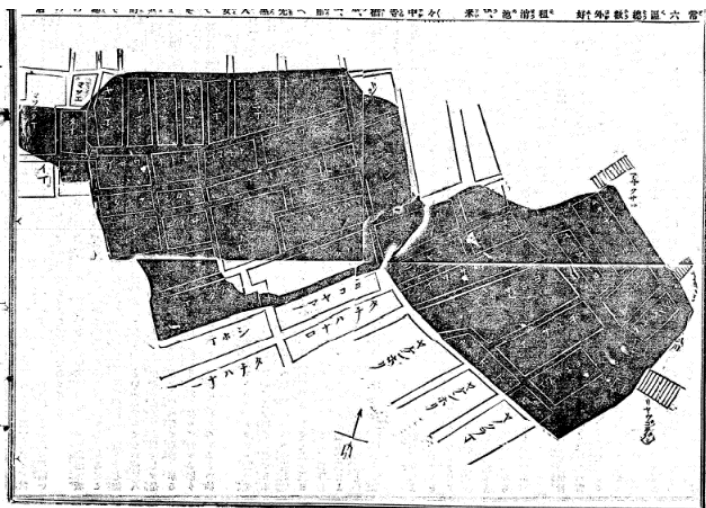


図1 松枝大火焼失範囲（読売新聞1881年1月27日）

#### ・猿樂大火（明治25年）

1892年(明治25年)4月10日の午前0時30分ごろに、神田区猿樂町一番地から発生した大火。24人が焼死、36人が負傷し、神田区と日本橋区を含む149,206平方メートルが焼失した。死傷者の大半が、上述の南明館の前身である浴集館（こうしゅうかん）で発生し、商業施設における防火対策に関する新たな法律が作られるきっかけとなった。



図2 猿樂大火の焼失範囲（東陽堂「風俗画報」(41)）



図3 治集館焼失の図（同左）

## ○大正期の大火

### ・三崎大火

1913年（大正2年）2月20日午前1時20分ごろ、神田区神田三崎町二丁目5番地（現在の神田三崎町一丁目9番）の救世軍大学植民館寄宿舎付近より出火した大火。焼失戸数は全焼2375戸、半焼72戸であった。防火対策が進み、火災の発生が大きく抑えられていった大正期間における最大級の大火。神保町の本町通りも大きな被害を受け、本町通りの形を大きく変えるきっかけともなった。



図4 三崎大火の消失範囲（保険銀行時報(609)より）

調査を進める中で、明治期以降の日本における近代化の各時点での諸相が、火災を通して浮かび上がってくることが感じられた。たとえば都市計画、建築思想、防火対策、消防制度、保険制度、スラム対策など、火災に対する都市としての対応をめぐる文献のなかには、近代化の諸課題がさまざまな形で表われていた。調査を通して見出されていったトピックは多岐に渡るが、比較的マイナーなトピックについては共有資料には含まなかった。またワークショップの限られた時間のなかで、実際に記事に反映できた情報は、調査された文献に含まれた情報の一部にとどまった。

## 2-2. 広報と本番準備

資料調査と並行して、イベント管理プラットフォームの Peatix を利用し広報を開始した。またワークショップ本番で実施する取材をかねた街歩きのルートを選定も進めていった。検討の結果、今回は特定の場所に取材に行くというよりは、大火で焼失した地域を実際に歩いてみて、その消失範囲の広さを体感してみる、という方針を取ることにした。取り上げる予定の三つの大火のうち、松枝大火はワークショップ会場から距離があるので外した。三崎大火の発火元が会場から比較的近かったことから、その地点を出発点とし、三崎大火の消失範囲をぐるっと歩いていくことを軸としながら、途中で猿楽大火の消失範囲も体感できるような寄り道も組み込む、という形でルートを作っていた。

参加者の募集は例年と同様に、イベント情報集約サイトの Peatix で行った。当初は1月13日開催の予定であったが、スケジュール上の問題が発覚し、2月25日に日程を変更した。募集期間を十分とれたこともあり、12名の参加者から応募があった。



図5 街歩きのルート (Google Maps の my map)

## 2-3. 資料の整理

これまでのウィキペディアタウンでは紙の資料が中心で、資料リストはワードファイルにまとめて参加者に共有していた。しかし今回の資料の中心は国会図書館のデジタルコレクションに収録されている資料であり、また点数もかなり大きくなった。そのため資料リストはMicrosoft Word形式ではなく、Google スプレッドシートでまとめ、参加者にリンクを共有するという方針を取った。

参加者に共有された Spreadsheet の一部

## 2-4. ウィキペディアタウン当日

ワークショップ開始の1時間前に集合し、会場の設営をしたのち、参加者の受付を行った。以下が当日のタイムテーブルだ。

10:00 - 10:15	受付
10:15 - 10:50	イベント趣旨説明およびウィキペディアの編集についての解説
10:50 - 12:00	フィールドリサーチ／記事用の写真撮影
12:00 - 13:00	昼食休憩
13:00 - 15:30	記事執筆
15:30 - 16:00	記事講評／振り返り
16:00	解散

当日欠席者が出たため、学生スタッフも執筆メンバーに加わることで、各チーム4名ずつの8名で執筆作業に当たることにした。人数の関係上、執筆トピックは猿樂大火と松枝大火の二つとし、「神田の大火」という独立した項目を立て、その中の下位項目として二つの大火について記述することとした。

以前のウィキペディアタウンに参加してくれたことのある参加者も何名かいたが、日常的にウィキペディアの記事執筆にかかわっている参加者は1名だけであった。はじめてウィキペディアの記事を編集する、という参加者も1名いた。

10時の定刻からワークショップを開始し、趣旨説明の後、ファシリテーターである Araisyohei 氏によるオリエンテーションおよび谷島貫太二松学舎大学准教授による題材についての説明が行われた。あわせて参加者の簡単な自己紹介と、挙手制でどちらの記事を執筆するかを決めるグループ分けを行った。

街歩きに際しては、事前にルート上に位置する場所の過去の写真などを集めた資料をアップロードし、スマホで資料を参照しながら歩けるように準備をした。



図6 大火直後の三崎町の惨状 (『神田の大火』)



図7 佛英和高等女子學校の惨状 (同左)



図8 錦町の工科學校の焼け跡 (同上)



図9 猿楽町の避難民の様子 (同上)

あいにくの小雨であったが、三崎町にある三崎大火の火元と推定される地点へとまず移動した。そこから延焼方向を記述した当時の記事などを説明を参照してもらいながら、アップロードされた資料を通して往時の状況に想像を巡らせつつ、三崎大火で焼失していった範囲の縁に沿う形で街歩きを進めていった。



図10 街歩きの様子①



図11 街歩きの様子②

通常のウィキペディアタウンでは、記事の対象となる文化財などを実際に見て写真を撮ったりするが、今回のトピックは特定の建物ではなく、また関連する建物はすべて焼失してしまっているため、基本的には過去の資料をもとに当時を想像しながら街を歩くという形になった。そんななか、カトリック神田教会や学士会館など、被災後に同じ場所に再建された建物は、とくに想像力を喚起する役割を果たしてくれた。スタッフによる説明をはさみつつ時折立ち止まりながら約一時間かけて予定のルートを歩いた。参加者たちは、歩いてきた範囲のほぼすべてが焼失してしまったという事実を、軽い疲労とともにリアリティをもって体感することができたようだった。神保町交差点の救世軍本営のあ

たりで昼食休憩解散となった。そして13時に会場に各自集合して午後の作業を開始していった。

午後のパートは、お題を使つての簡単な練習から作業を開始した。与えられた文章をもとに、付箋を使って基本的な情報を書き出していった。10分の時間が与えられ、ホワイトボードに張り出した付箋の情報を整理し、事典の項目として必要な情報を組み立てていった。この練習を踏まえて、グループごとに資料の読み込みを開始していった。



図12 資料の検討を始める



図13 付箋にまとめた情報をもとに内容の整理



図14 ひたすら執筆作業

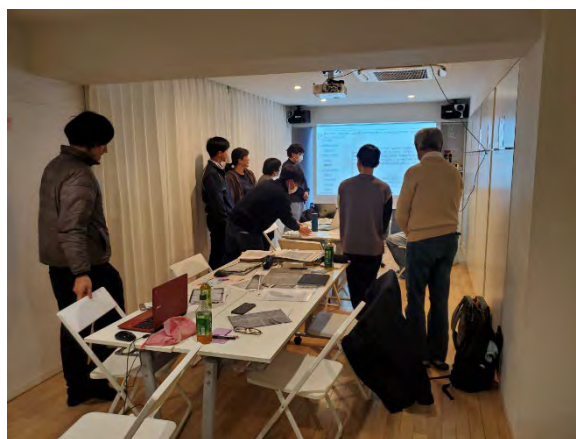


図15 最後の講評の時間

記事の構成案ができると、今度は担当を決めて関連資料を読み込むフェーズに移る。各テーブルには付箋が用意されており、ファシリテーターの Araisyohei 氏から、資料内の必要な情報を資料の出典情報とあわせて付箋に書き込んでいくようアドバイスがなされる。参加者が黙々と資料を読み進めていくなか、様子を見てスタッフが参考になりそうな資料を紹介していく。ホワイトボードに整理された各記事の構成表の各パートに、情報を書き込まれた付箋が貼り付けられていく。

例年、時間が大きくとられる作業の一つに出典情報の整理がある。記事執筆に際して、個別の記述に注を付け、しっかりと出典を付けていく。その際には、出典の文献の著者や書籍名、出版社、出版年など情報を細かく書き込む必要がある。しかし今年度は事前に Spreadsheet に情報をまとめ、さらにファシリテーターの Araisyohei 氏がウィキペディアにそのまま読み込ませることができるようにタグを設定してくれていたため、出典の表示は極めてスムーズに進めることができた。しかしそれで

も明らかに時間が足りず、残り時間のカウントに焦った声がテーブルのあちこちから聞こえてくる。

グループで記事執筆を進めていく際には、編集競合にも気を付けなければならない。同時に並行して編集を進めてしまうと、作業が衝突してどちらかの作業が消えてしまうことがある。なのでこまめな声掛けが必要となる。この日、急に作られたチームであるにもかかわらず、しっかりと声を掛け合いながら情報を整理し、順番に編集作業が進められていく。ブラウザを更新していくと、「神田の大火」の記事が少しずつ進化していくのが確認できる。結果として、当初の予定より10分だけ作業時間を延長して、講評の時間に入った。

猿楽大火、そして三崎大火の順番に、チームごとに自分たちが行った作業と苦労した点、心残りの点について報告していく。猿楽大火の中項目については、限られた時間のなかで、基本的な情報に加えて当時の消火技術や特筆すべき個別の被害状況、さらには当時黎明期にあった火災保険についての記述も組み込んだ内容となった。チームのメンバーたちも、それぞれに反省の弁を述べながらも、それなりの手ごたえを感じていたようだった。三崎大火の中項目については、扱われた情報の量としては少し少な目ではあったが、基本的な情報はしっかり押さえている。さらに火元に関する下位項目では、火元をめぐるの時系列を異にする複数の資料から、多角的な記述を行っており、かなり深く資料を読み込んだことがうかがわれた。

限られた時間で行われた作業としては、いずれも十分なものと言える。もちろん個々の課題は多く残っている。たとえば猿楽大火においては、それぞれの下位項目間で抽象度が一致していない部分もあり、記事全体のバランスとしては改善の余地がある。また個々の情報についても、背景となる文脈の提示が不十分であることで、その意義が伝わりきっていない記述もあった。三崎大火においては、広範な資料をさばききることができず、きわめて重要な論点にもかかわらずカバーしきれなかったものもあった。ただしウィキペディアタウンは、完璧な記事を作ることがゴールではない。もちろん一定以上の記事の質を担保することは重要だが、ワークショップに参加した体験としては、むしろやり残したことがあった方がよい、という側面もある。ウィキペディアは絶えず成長する百科事典であり、完成形というものはない。ここの記事においても同様だ。調べれば調べるほど、書くべき事柄は増えていき、結果として記事も成長していく。ウィキペディアがもつこうしたダイナミズムを体感することも、このワークショップにおいては重要な側面だ。

運営側からすると、ウィキペディアタウンを開催するにあたってどのくらいの資料を用意すべきか、というのは悩ましい問題だ。もちろん記事を執筆するための最低限の資料は必要だ。しかしトピックによっては、活用できる文献の量は際限がなくなる。そしてワークショップの限られた時間では、資料が多すぎても活用しきることはできない。ではどこまで絞るのがよいのか。この問いには答えはないが、わたしたちのゼミで実施してきたウィキペディアタウンでは、使えそうな文献であればできるだけ多く集める、という方針でこれまでやってきた。それは、ワークショップの時間内で役に立つかどうかというよりも、むしろそのような圧倒的な資料の量に接すること自体が、とても貴重な経験になるという判断にもとづくものだ。分け入っていけばいくほどさらにその奥がある、という感覚はいかなる研究においても重要となるが、ウィキペディアの記事執筆についても同じことは当てはまる。

ウィキペディアの記事執筆には完成がない、というこの性質は、ウィキペディアタウンというワークショップにとっても重要となる。ワークショップの時間そのものには終わりがあるが、しかしそこで参加者が書き始めた記事は、ワークショップ終了後にもいくらかでも書き足していくことができるからだ。今回は情報をスプレッドシートに集約し、国会図書館のデジタルコレクションへのリンクも含めることで、参加者が家に帰ってから資料を参照し、記事のブラッシュアップをしていきやすい環



境を用意した。実際、ワークショップの実施日の夜にはすでに、いくつかの項目において参加者がさらに執筆を進めていた。ワークショップ本体は、完結した作業としてではなく、このような開かれたプロセスの一部として位置付けられるべきだろう。

さらにこの開かれたプロセスの一部としてのウィキペディアタウンというとらえ方は、神保町というフィールドとも非常に相性がいい。歴史を持ち、日本の近代化において重要な役割を果たしてきた神保町やその周辺地域である神田は、ただしくトピックを選択すれば、いくらでも分け入っていくことのできる深い森として機能する。だから調べれば調べるほど資料が出てくるし、扱うべき論点も非常に多岐に渡る。この場所が持つポテンシャルを最大限に生かすためにも、神保町で行われるウィキペディアタウンはより開かれたものとして設計するのが望ましいと考える。

**神田の大火** 【ソースを編集】

この記事はたいへん大きな改訂を行っています。詳しくは、[新しすぎず、おもしろい編集の指針](#)をご覧ください。 [Wikipediaの編集を始めるためのガイド](#)もご覧ください。 [Wikipediaの編集を始めるためのガイド](#)もご覧ください。

**神田の大火**（かんだのだい）では、江戸・東京市の神田地域（その後の高層部**千代田区神田**）で起こった大きな火災の歴史を説明する。江戸には火事がつきもので、なかでも神田は火災の中心地であった。神田に火災が起きたものにも関わらず、1625年（寛永3年）に神田區田町から、1820年（文政12年）に江戶区神田から、1895年（明治28年）に神田區神田から火災が、それぞれ大きな被害を出している（文政の大火）<sup>[1]</sup>。明治に入っても神田は火災の多発地であり続けた。明治後半になると被害の数が100を超え死者も1000を超え、日本橋、築地と並んで、神田は「火の墓場」<sup>[2]</sup>といわれた。

**大火の要因** 【ソースを編集】

神田に大火が多い原因としては主に以下の要因が挙げられる<sup>[3]</sup>。

1. 江戸期に近く敷居が低く、また瓦葺きも禁止して葺瓦葺きが多かったことから、飛び火による延焼を引き起こした。
2. 江戸期の火災が多かったため水道の水を確保していたことから、火災の際に消火のために十分な水を確保できなかった。
3. 西側に千代田城、西に麹町台、北は惣持台と高層部が位置しているという地理的条件により、冬季は特に東京湾からの潮を受け火が燃え、日陰に向かつて火がよりやすくなった。

**江戸期の主な大火** 【ソースを編集】

**文政の大火** 【ソースを編集】

詳細は「[文政の大火](#)」を参照

文政13年3月21日（1820年4月24日）の午前10時ごろ、徳川幕府二丁目の材木町屋から火災、江戸全体の1割を超える三六の町が焼失し、罹災者は3万7000名に達した。江戸三大火に次ぐ大火とされる<sup>[4]</sup>。

**明治期の主な大火** 【ソースを編集】

**松枝大火** 【ソースを編集】

1881年（明治14年）1月26日の夜半、神田松枝町から火災、表裏の全棟一万戸超、罹災者も3万6000人を超える大火となった<sup>[5]</sup>。被災地域には橋本町の入山山荘も含まれ、当該地区の両側面のまっかきけもなった<sup>[6]</sup>。

図 16 「神田の大火」の項目

**猿楽大火** 【ソースを編集】

1892年（明治25年）4月10日の午前8時30分ごろに、神田区猿楽町一帯から発生した大火である。午前9時30分ごろに一帯の火は消えいったが強風により再燃。同日の午前11時30分に消防隊の火通りで鎮火した。この神田の大火では、24人が焼死、36人が負傷し、神田区と千代田区を合わせた149,206平方メートルが焼失。そのなかには東京法学院(現・中央大学)や三善書局があった<sup>[1]</sup>。

**出火から鎮火まで**

明治25年4月10日、午前8時30分ごろ、火災が発生。火元は神田区猿楽町一帯の敷居が低く、瓦葺きの町屋。原因は番人の煙草火による壁紙の火の消し忘れである<sup>[2]</sup>。前日の9日から強い北風の嵐が吹いており、消防隊が出火に気づく警報を放っていた。しかし10日の午前9時30分ごろに日本橋から火の幸が上がる。風向には水溜りの設置がなく風が吹き荒れ途中で燃え広がった<sup>[3]</sup>。火の手は三丁に波及したが、小川町通り、神保町通り、麹町通りそれぞれを延焼、麹町の火災が燃え広がると町一帯を焼いて小川町の火災と合流した（焼失2）。午前8時30分ごろに鎮火するのに見えた消火活動は風による取り火の燃りで再び上り、小川町、麹町、鎮火町、間口町等にも燃え広がった。ようやくして午前11時30分、今川町で鎮火した。

**消火活動と高層部焼** 【ソースを編集】

4月10日午前11時15分、小川町警察署より消防隊長の川畑権兵衛に出火の連絡があった。川畑は各消防分署の蒸気ポンプ（蒸気バンプ）の出動と消防船の出動を要請し、自ら消防船にも乗った。強風により火災活動は困難を極め、8台の蒸気ポンプをそれぞれ7回移動させ、100回以上の消火活動によってようやく鎮火させた。川畑は後日、この火災が4000戸の焼失にとどまったのは蒸気ポンプの効果によるものであると述べている<sup>[4]</sup>。

**中央大学の焼**

東京法学院（現在の中央大学）はこの大火で当時約4年余の校舎を、600坪計が焼失したとされる。また、専任の専任教授の遺書も1107枚の遺書が発見された<sup>[5]</sup>。しかし、必要書類が焼失したため、火災後の対応がままならなかった。火災の3日後には専任教授会議を開き復旧作業を開始した。また、校舎の再建は明治法政の取次でロンドンの保険会社にかけた一橋大学が保証書と保証書を行い、松石五郎の折衝を経て9月中旬に完了した。しかしこの保証書では修繕の回復には十分ではなく、校舎は一階建てとなった<sup>[6]</sup>。

**安田火災上乗換**

当時の火災保険であった「[明治責任東京火災保険会社](#)」はこの神田の大火により莫大な損害を受け、安田火災上乗換に会社の株主を募集した。そして、安田火災の傘下となった東京火災は翌年の1893年6月に「東京火災保険株式会社」となり、のちの安田火災上乗換（現・損害保険ジャパン）となる<sup>[7]</sup>。

図 17 猿楽大火についての中項目

**大正期の主な大火** 【ソースを編集】

明治時代前期の東京では、江戸時代と異なり火災が起るようになっていた<sup>[1]</sup>。やがて明治時代の整備が進み、建築物も次第に耐火建築が増えてきたため、大正期に入ると焼失戸数3000戸以上の大規模火災は起こらなくなった<sup>[2]</sup>。さらに焼失戸数1000戸程度まで下がると、以下で述べる1913年（大正2年）2月20日の三崎の大火の他に1921年（大正10年）4月6日の浅草田町の大火、1925年（大正14年）3月16日の日暮里の大火のみである<sup>[3]</sup>。

**三崎大火** 【ソースを編集】

**火災の経緯**

1913年（大正2年）2月20日午前1時20分ごろ、神田区神田三崎町二丁目5番地（現在の神田三崎町一丁目9番）の教習等大正練兵場事務所付近より火災した<sup>[4]</sup>。火は軒からの燃焼（北風の勢）にあおられて自力に延焼した<sup>[5]</sup>。一方の火の手は三崎町一丁目・二丁目を水溜り方向に燃え広がり、もう一方の火の手は中野区神田に燃え広がり、東京市電の線路を飛び越えて沼津（現在の沼津）付近まで燃え広がった。火は約1時間かかって燃え広がり、午前3時30分ようやく鎮火した<sup>[6]</sup>（鎮火時には高層部があり、午前8時ともいふ）<sup>[7]</sup>。焼失戸数は全棟2375戸、焼失72万坪であった<sup>[8]</sup>。

**被災地域**

中野区前、三崎町、表参道町前、北神保町、表裏神保町、麹町等<sup>[9]</sup>（18）<sup>[10]</sup>

**被災した主な建物**

外国語学校、慶応中学、東京中学、仏教女子学校、大蔵中学、工科大学、敬愛女学校、一橋書院、早稲田書院、東京書院、聖山書院、聖山書院、中央（バプテスト教会、水戸学院等）<sup>[11]</sup>（14）

**出火元**

2月20日の大火において当初、敬愛女学校校長が火元と考えられていた<sup>[12]</sup>。そのため多少世評からの反感があり、新聞社に対して敬愛女学校の山室重平が謝罪文を送った<sup>[13]</sup>。その後、敬愛女学校校長経験年からの出火したという有力な証言があり、敬愛女学校そのものの資料をもとに調査を行って、資料に提出された<sup>[14]</sup>。それを元にした調査が後述のとおりには敬愛女学校校長経験年からの出火ではないと判明した<sup>[15]</sup>。

図 18 三崎大火についての中項目

**脚注** 【ソースを編集】

1. 中村 1935, pp. 101–102.
2. 藤村 2004, p. 60.
3. 敬愛女学校校長経験年 1925, p. 94.
4. 国史刊行会 編 1964, p. 234.
5. 東京の神田区神田区神田区神田区 1960, p. 42–43.
6. 藤村 2004, p. 73–78.
7. 東京の神田区神田区神田区神田区 1950, p. 71.
8. 日本経済新聞 1981.
9. 東京 1892.
10. 東京 1915.
11. 川畑 1905.
12. 中野区 2010, p. 267.
13. 中村 1935.
14. 中野区 1970, p. 71.
15. 中野区 1970, p. 71.
16. 中野区 1970, p. 71.
17. 中野区 1970, p. 71.
18. 中野区 1970, p. 71.
19. 中野区 1970, p. 71.
20. 中野区 1970, p. 71.

**参考文献** 【ソースを編集】

- 中村 1935 『神田文化史』神田区研究協会、1905年。
- 藤村 2004 『明治の東京』中央書局、1905年。
- 神田区神田区神田区神田区 『神田区神田区神田区神田区』神田区神田区神田区、1905年。
- 東京の神田区神田区神田区神田区 『東京の神田区神田区神田区神田区』東京神田区、1905年。
- 国史刊行会 編 『明治の日本神田区神田区』国史刊行会、1905年。
- 東京新聞 『神田区神田区神田区神田区』神田区神田区神田区、1913年。
- 中野区 『神田区神田区神田区神田区』神田区神田区神田区、1913年。
- 『東京新聞』174号 『東京新聞』1913年。
- 山久 『東京と火災』日本風土と火災』全通社出版、1978年。
- 東京文化協会 『東京、明治、大正』大正十一年 第9巻 『東京文化協会』1933年。

カテゴリ: 神田の歴史 | 江戸時代の火災 | 明治時代の火災 | 大正時代の火災

図 19 脚注と参考文献

### 3. まとめ

今回のワークショップでは、特定の場所や建物ではなく、「神田の大火」という広範な影響を巻き起こした災害という事柄を対象とした。その選択に伴う難しさはもちろんあったが、しかし同時にだからこそ見出せた可能性というものもあった。たとえば街歩きの際には、大火で焼失した範囲を実際に歩くという活動を行った。ウィキペディアタウンを行う際には、いつも何らかの形で想像力によるタイムトラベルという側面が含まれるが、1時間弱の時間を延々と消失範囲に沿って歩くという経験は、このタイムトラベルをより生々しいものとして体験させてくれた。さらにまた大火という出来事の影響範囲の大きさから、日本の近代化というとても大きな歴史的な文脈を垣間見せてくれる特別な機会にもなった。神保町で明治、大正の事柄を扱えば、もちろんどこを叩いても近代化の響きが返ってくるわけだが、しかし大火は地理的な範囲の広さだけでなくさまざまな側面に影響を及ぼすものでもあり、それ一つで多種多様な響きを集めることができる。個別のトピックではカバーすることができない、きわめて多角的な日本の近代化の像を結ぶことが可能となった。

しかし過去の資料を細かく探っていくことでとりわけ印象深かったのは、「神田の大火」という大きな看板の影で、実際に被害を受け、右往左往しながらも復興のために動いていった個々に人間の声であった。大きな事件の足元では、必ず生きた人間がいる。そして文献資料の片隅にも、そうした生きた人間の声が辛うじて反響している。その声に耳を傾けることで、過去の災害が教科書に載った情報ではなく、誰かの生きた体験として想像可能となる。こうした想像力を養う機会という点でも、神保町で災害をテーマとしたウィキペディアタウンを実施することには大きな可能性がある、という点も強く感じることができた。